

# 古代エジプトの騎馬土偶

辻 村 純 代\*

## Abstract

No small number of horses was bred in ancient Egyptians, unlike the Scythians or the Persian who used them to ride on but they were used to pull chariots. Moreover, again unlike Greece or Persia a horse was neither a god's incarnation in the Egyptian religion, even in the Late Period when the animal cult became popular, nor a vehicle for any god or for the dead.

Nevertheless, some kinds of hand-modeled terracotta figurines of "horse and rider" belonging to the Late Period were found in large city sites in the Delta. And the marvel is that the figurines of Palestinian type were unearthed with figurines of the local deity of Renenutet (or Renenet), and the unidentified anthropoid figurines from the layer of the Late Period in Akoris, which was a small city located in the Middle Egypt. One of the horsemen uncovered has a shield worthy of a warrior.

In the Hellenistic Period, mold-made terracotta figurines of Harpocrates, the infant Horus, riding on a horse appeared in Egypt. He has a brave character shown by his subjugating crocodiles and scorpions that symbolized harms and disasters in spite of his outward appearance as a child according to the representations on Horus-cippus who was beginning to prevail as a healing cult from the Late Period. Dioscuri, the twin Greek gods and warriors, were also associated with horses. In Akoris, they are represented with horses in relief on the south cliff in view of the Nile. Because Akoris was known as a port for Roman river trade, they attracted people's belief as protectors of navigation the same as the Egyptian god, Sobek, at that time.

A horse and rider figurine linked one to gods through the medium of heroes and led Egyptians to embrace such figurines after the Hellenistic Period. That is, the horse and rider was accepted because the Egyptians understood its meaning in their own religious context rather than merely by the Greek influence.

## は じ め に

カイロから南に 250 km, ナイル東岸を南北に連なる河岸段丘上に位置するアコリス遺跡は、一般にはギリシア・ローマ都市として知られている (Fig. 1)。遺跡の南部に聳える巨大な岩山は、古来より南に向いて臥せるライオンの頭に擬せられた。北に向かってなだらかに下降する段丘はライオンの背中にあたり、そこを市街地として王朝時代から初期イスラム時代まで長期に亘って都市が営まれ、今も残る無数のレンガ壁が往時の繁栄を伝えている。

第3中間期には既に都市が存在したことが奉献碑文<sup>1)</sup> などから推定されるが、遺構によって確かめられたのはこれまでのところ末期王朝時代からである。都市の中心を占拠する西方神殿域からも末期王朝時代の遺構を検出したけれども、紀元後4世紀初頭に大規模な修復事業が行われたために比較的よく保存されている神殿域での深堀は難しく、その範囲にも自ずと限界がある。図らずも、その不足を補うべく実施した都市の縁辺部における近年の発掘で、末期王朝時代の遺構や遺物に恵まれ、その結果、当時の市域はギリシア・ローマ時代とほぼ同規模であったこ

\* 国士舘大学イラク古代文化研究所

1) 神殿域から、アメン・ラー神に奉献された第21王朝ピノジェム I (内田杉彦訳) と第23王朝オソルコン III (富村傳訳) の石碑が発見されている。更に、ナバタで発見された第25王朝ビー王の碑文には、王がアコリスの都市を攻略したことが記されている。H. Kawanishi and S. Tsujimura eds., "Akoris 981-1992", Kyoto, 1995.

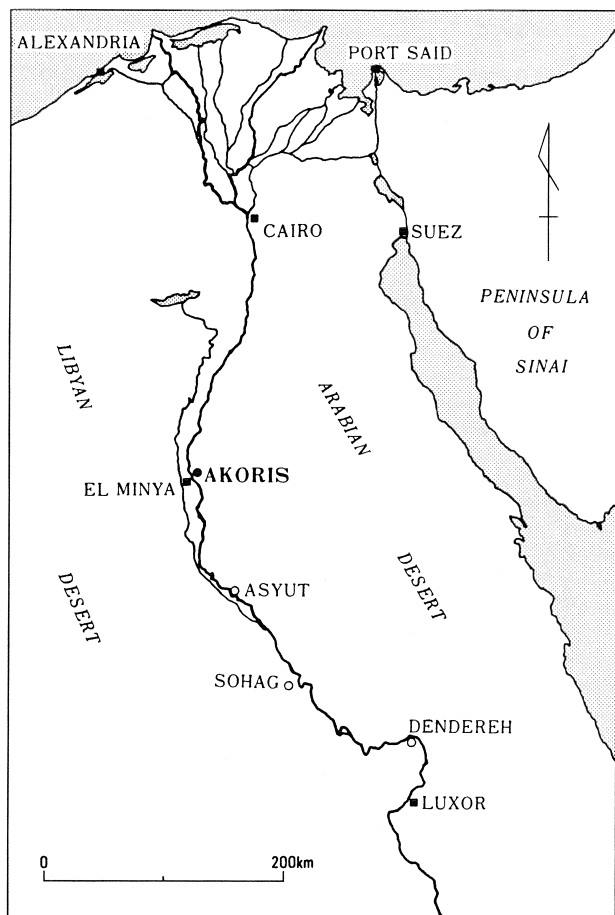


Fig. 1. Map of Egypt

とが明らかになった (Fig. 2)。

都市北端部の発掘ではプトレマイオス朝時代の石材加工場の下層から末期王朝時代の都市壁が検出され、また、岩山の南側斜面や西側斜面でも倉庫、窯跡、墓など同時代の遺構が数多く発見された。そして、これら末期王朝時代の層からは大量の土器に混じって、種々の遺物を得ることができたのだが、なかでも興味を惹いたのはギリシア・ローマ時代に大量に生産された土偶 (Terracotta Figurines) とは技法的にも形態的にも異なる土偶である。

この時代の土偶についてはメンフィス (Memphis) やナウクラティス (Naucratis) をはじめ外国の商人や傭兵が多く居住していたデルタ地域の都市遺跡からの報告例があるけれども、量的にはそれほど多くないし、それらの性格も明らかにはなっていない。そこで、本稿ではナイル河谷の都市としては稀少な出土例である末期王朝時代のアコリスの土偶について紹介するとともに、周辺諸地域出土の土偶と比較しながらその系譜と

宗教的背景について若干の考察を加えたいと思うのである。

### 都市北端部の調査 (Fig. 3)<sup>2)</sup>

アコリス遺跡の北端と、その北に広がるテヘネ村との境には、深い掘削と護岸工事によってV字状の大溝が築かれている。約20年毎に繰り返される南の砂漠からの鉄砲水が遺跡の東裾を通過して村内に流れ込むのを避け、西方のナイルに導くため、涸れ川と同様に通常、水は流れていない。しかし、都市を建設した当時からここが谷状の地形を有していたことは、末期王朝時代の包含層と洪水層とが互層になって堆積している断面や末期王朝時代の都市壁が幾度となく修復されていることから容易に推測できる。包含層から出土する土器は水に晒されるために小片が多いのだが、なかに馬形と人形からなる2種の土偶が含まれていた。どちらも手捏の中実製品である。

プトレマイオス朝時代になると、この場所は直径2.5 m、長さ16 mもの大型円柱の加工場として利用された。その他にも大型の方形石材などが散在しており、近在の山から切り出されたこれら石灰岩製の石材はここで加工され、そしてナイルの水運を利用して大都市へと運ばれたのであろう。

突然と思われる加工場の操業停止後は、余り時を経ずして輸入アンフォラ (350点)、ランプ (100点以上)、土偶

2) Excavations at the North Area were reported in H. Kawanishi and S. Tsujimura eds., "Preliminary Report Akoris 1997", Tsukuba, 1998 ~ "Preliminary Report Akoris 2001", Tsukuba, 2002.

(150点以上), 織機用土錘 (少なくとも100点以上) などを含む大量の日常生活雑器が2 m程の厚さの焼土とともに円柱の内側, つまり居住地寄りの空地に廃棄された<sup>3)</sup>。焼失家屋が数軒, あるいはそれ以上としても, 一般住居が所有する量にしては想定し難いほどの大量の輸入アンフォラであるために, 輸入業者の倉庫だった可能性もある。しかし, そのいっぽうでは, 生活雑器をはじめとする他の遺物からみて一般住居からの廃棄物が含まれていたことは疑いないところであり, 神々を象った土偶も各住居で保有されていたと思われる。

これらの遺物の大半はプトレマイオス朝後期(紀元前2世紀後半以降)に属しており, ローマ時代の土器を含んでいない。従って, 石切り場という遺構の性格からして遺物が少なく決め手を欠くものの, その操業期間はプトレマイオス時代前期であった可能性が大きい。

焼土層から出土したランプや土偶のほとんどは, 半面ずつ型作りで成形して中空の製品に仕上げる方法で作られており, その技術はギリシアから伝わったものである。また, 縦糸を引っ張っておくための錘もエジプトの伝統的な織機では使われることのなかったもので, ギリシアやパレスティナ地方の垂直機に用いられる道具である。このような新しい技術や製品が, 遅くとも前2世紀中葉にはアコリスで一般に普及していたことがわかった。

さらに, 焼土層の上にはローマ時代以降の攪乱層が堆積しており, この攪乱層と石材加工場の東方にある窯跡や墓からは後期ローマ(コプト)時代の土偶が数点出土している。この時代の土偶になるとギリシア・ローマ的な精緻な表現はすっかり消えてしまう。神殿域周辺に密集する同じ時期の家屋からは巧拙あるものの型作りのランプが多く出土するのに対して, 土偶はほとんどみられず, キリスト教の浸透に伴ってそれまでの家内信仰的な性格が変化したのか, 数量も激減したようである。

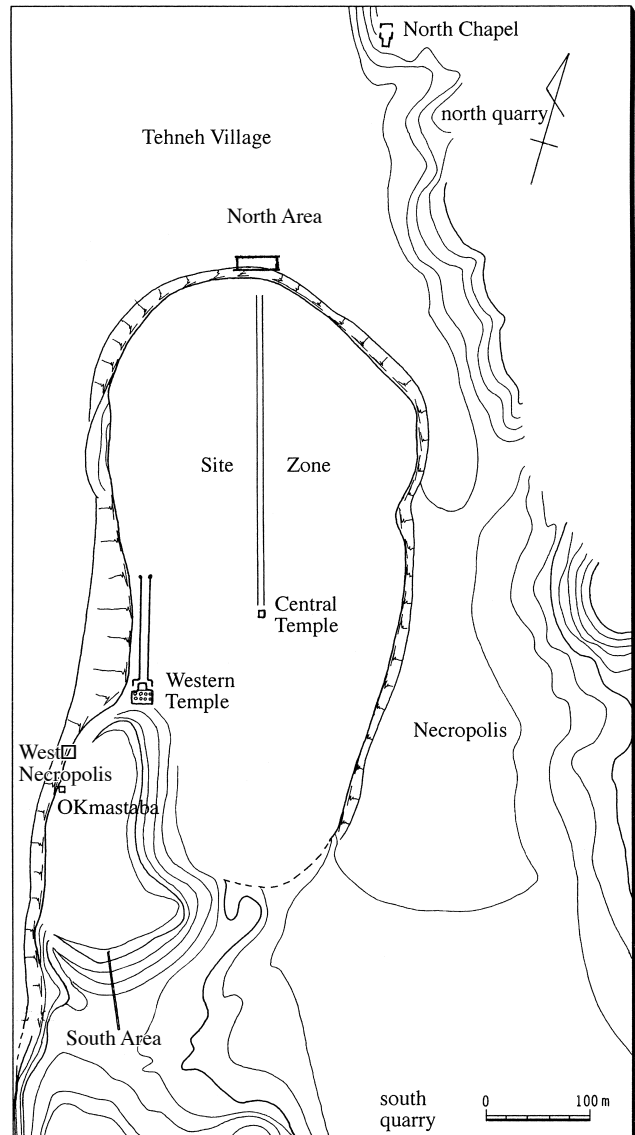


Fig. 2 Map of Akoris

3) アンフォラについては, 出土品のすべてを集成し, 周藤芳之氏が考察を加えている。(Y. Suto, "Akoris I Amphora Stamps" in H. Kawanishi and S. Tsujimura eds., Akoris Archaeological Project, 2005) また, 土偶については, 筆者が取り上げ, その性格について論じた。(辻村純代「末期王朝時代における宗教の変容—プトレマイオス朝時代のテラコッタの淵源を求めて」, 屋形禎亮編『古代エジプトの歴史と社会』東京, 2003年, 337—354頁)





Fig. 3 General view of the north area from the west

#### 都市南端部の調査 (Fig. 4)<sup>4)</sup>

ライオンの顔に見立てられる垂直に切り立った岩山の下は、段丘の谷間に向う急な斜面を形成している。斜面にもかかわらず、末期王朝時代には高位に厚い東西壁が築かれ、その下方には革工房や円形倉庫群、炉群が作られている。女性や子供の墓も点在する。

北端部と同様、居住区としてはいかにも利用しづらい場所なのだが、東方砂漠や反対側のナイルなど眺望は良く、防衛機能の面では有利な立地条件といえる。また、谷間をわたる風が強いので、悪臭を伴う作業や大量の煙を発生する作業を行うにも適している。部分的にブトレマイオス時代のレンガ壁が残り、その時代の遺物も出土しているが、土偶は末期王朝時代のものに限られる。いずれも手捏の中実製品で、北端区でみたような型作りの土偶はこれまでのところ1点も発見されていない。

ここから出土した土偶のうち、コブラ形と人形の2種は、岩山の西側をめぐる狭長なテラス部分を利用した墓地からも出土している。古王国時代のマスタバ墳を中心にした竪坑墓群を末期王朝時代に再利用しており、その際に埋納されたものだろう。幾つかの墓には被葬者の骨が残っていたのだが、死者の性や年齢と土偶との関係は判然としない。ギリシアでは子供の墓におもちゃの土偶を副葬する習慣があったが、少なくとも、ここではそのような特別の関係は認められない。ただ、これら2種の土偶が墓地から出土したことにより、副葬品として用いられること

4) Excavations at the South area and the West necropolis were reported in “*Preliminary Report Akoris 2002*”, Tsukuba, 2003 and “*Preliminary Report Akoris 2003*”, Tsukuba, 2004.



Fig. 4 General view of the south area from the south

があったことは否めない。また、墓に関係していることを示す積極的な根拠を欠く南端区の土偶についても、この地区が居住地には不適な環境である点を勘案するならば、土偶が子供の単なるおもちゃとは考え難い。

### アコリス出土の土偶 (Fig. 5)

これまでアコリスから出土した末期王朝時代の土偶はすべて手捏作りで、中実の粗製品であるが、形態的には以下のように分類できる。

- 1 : コブラ形 (Fig. 5 No. 1), 29点
- 2-a : 人形 (Fig. 5 No. 2, 扁平な体部に円形の貼付け文を有する。), 18点
- b : 人形 (Fig. 5 No. 4~6, 立体的な頭部と体部をもつ。), 3点
- 3-a : 動物形 (牛), 4点
- b : 動物形 (Fig. 5 No. 3, 馬。), 1点

コブラ形も 2-a の人形も頭部が破損している例が多く、その断面をみると、まず芯となる粘土を固めて作り、その上に別の粘土を貼付けて成形しているのがわかる。コブラ形は高さ14~5 cm で、頭部が前方に突き出し、頭部付近で最も幅が広い体部は下方になるに従って窄まり、底部が後方に伸びる姿は粗製ながらコブラの特徴をうまく表現している。顔の両側面には粒状の目を貼付け、体部前面には2本、あるいは3本の幅広い赤色の横線が引かれている。

古代エジプトではコブラはレムヌテト女神の化身とされ、王の守護者であるとともに子供の養育者、収穫物の保



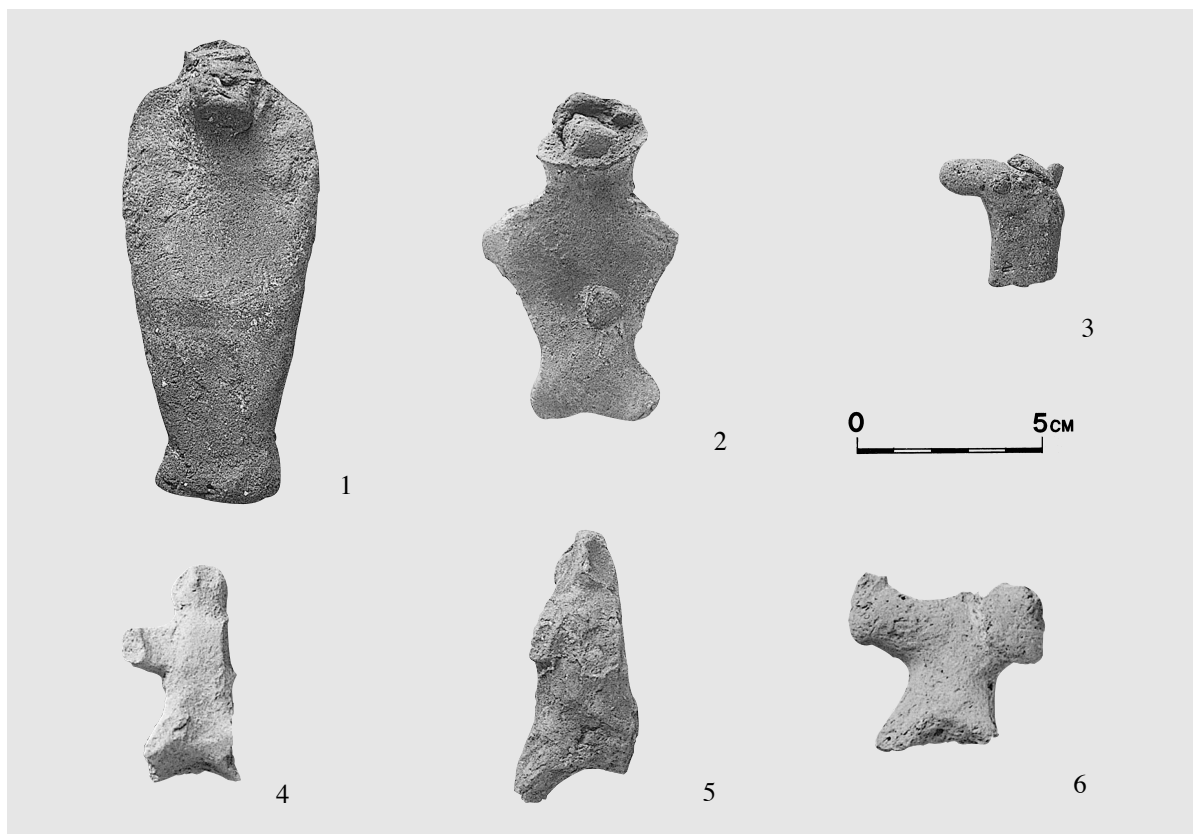


Fig. 5 Terracotta figurines (No. 1: Type 1, No. 2: Type 2, No. 3: Type 3-b, Nos. 4-6: Type 2-b)

護者という性格を付与されている<sup>5)</sup>。墓地からも出土していることや、ギリシア・ローマ時代になるとイシス女神と習合するといった点で、子供の養育者・保護者としての性格がレムヌテト女神への信仰を誘ったと考えたいが、南端区から数多く発見された多数の円形倉庫群は、収穫物の保護者としての女神の性格がこの土偶に求められた可能性も捨て去ることはできない。

2-a は高さ 9 ～ 10 cm で、大き過ぎる頭部と方形の体部に極端に短い手足がついた、バランスの悪い体型を呈する扁平な土偶である。両肩の部分に赤の着色が残っているものが 1 例あるけれども、コブラ女神像のような明確な帯状の彩色を施していたか、どうかはわからない。このタイプの最も大きな特徴は、体部前面に貼付けられた直径が約 1 cm 余りの円形の粘土粒である。通常は 1 つで中軸線上にあり、例外的に 2 つ付けたものがあるが、その場合も縦に貼り付けられているので、この円形が乳房の表現でないことは確実である。一般に女神／女性の性は乳房の丸い膨らみや下腹部の逆三角形によって表現されるのだが、この土偶にはそのような表現はみられないので、女神／女性に限らないわけである。そうであれば、円形貼付け文は妊娠状態を示すのか、あるいは臍を表現した可能性がある。もし後者ならば、全体の特徴も合わせ乳幼児の体を表現しているのではあるまいか。

これに対して、2-b タイプの人形は立体的で、高さ 5 ～ 6 cm と小さい。両手を左右に広げたり、前に伸ばしたり、さらに左手に盾をもつ例もある。脚がどれも大きく左右に開いているので、元々は共伴の馬形土偶に接合された騎士像であったと考えられる。手捏の場合、ギリシアでも西アジアでも騎馬像は騎士と馬とは別々に作り、その

5) アコリスにおけるプトレマイオス朝からローマ時代にかけての信仰について、山花京子氏はレムヌテト女神とイシス女神とを中心にエジプトの神々とギリシアの神々の習合のプロセスを論じている。(山花京子「古代エジプトにおけるヘレニズムの神々の受容について」『文明』No. 3 東海大学文明研究所, 2003, 67-76頁)

後で合体させるために、両者が分離して出土することは珍しくない。顔は側面に2つの小さな窪みのなかに粘土粒を貼付けて目を表現し、窪みの間はそのまま残って鼻のように見える。

3-a は体長 6 cm ほどの小型品 2 点と 10 cm 以上の中型品 2 点が含まれる。小型品は幅の広い顔に短い首、いかつい肩と短い脚など牛の特徴をよく捉えている。目は粘土粒を貼付けている。他方、中型品は頭部が欠如しているものの、体部がずんぐりとしており、脚も短いから、これも牛の可能性が大きい。4 点とも南端区から発見された。

3-b は 1 点だけで、頭から首にかけての部分が残っている。長い首と、額髪から馬とみられる。これも他の土偶と同じく、小さな粘土粒を貼付けて目を表現している。

これらのタイプを改めて出土地区ごとに分けてみると、1：南端区10点、西端区8点、2-a：南端区18点、西端区11点、2-b：北端区3点、3-a：南端区4点、3-b：北端区1点となり、南端・西端区と北端区とで土偶のタイプの違いが際立っていることに気付く。すなわち、南端・西端区出土の土偶が土着的であるのに対して、北端区出土の騎馬土偶には西アジアやギリシアの土偶に繋がる外来的な要素が認められる。これが末期時代のなかにおける時期的な違いによるものなのか、土偶の扱い方の違いによるものであるのかは共伴土器についての編年研究の成果を待たねばならないのだが、両者がともに末期王朝時代後半の土器であることは確実であり、土偶の形態を一変するほどの時期差があるとは考えられない。

## エジプトの騎馬土偶

メンフィスで発見された末期王朝時代の土偶のなかには、2つの異なるタイプの騎馬像が含まれている。一つは F. ペトリが騎手の被り物の特徴からスキタイ人と推定した土偶で、全体を鋳型で作っているが中実の製品である。長いあご髭と高い頬が印象的で、大きくはっきりとした目の形も鋳型から写されたものだ。他方、アコリスの 2-b タイプと共通する手捏の騎馬像がある。報告書のなかで、ペトリはナウクラティスやダフネ (Defenneh)、ヤフディーヤ (Tell el Yahudiya) などデルタ地域の他の都市遺跡からも後者のタイプの土偶が出土していることを指摘しているのだが、その起源に関しては不明としている<sup>6)</sup>。

ナウクラティスでは紀元前 6 世紀以降の土偶が奉獻品として大量に発見されたが、その大半はギリシア・ローマ時代に属し、それもアコリスと同じく前150年以降に急増するのであって、末期王朝時代の土偶は意外に少ない。問題の騎馬土偶をペトリは前 7 世紀と推定しているけれども、ナウクラティスの騎馬土偶に関してはそれよりかなり降るとみる意見は強く、W. クールソンが実施した近年の発掘でも、前 4 世紀中葉と推定する R. ヒギンズの説に説得力がある<sup>7)</sup>。ただし検討されている馬形土偶は、手捏製ではあっても目や口は沈線で表現されており、粘土粒を貼付ける 2-b や 3-b タイプの土偶とは異なる。そこで、クールソンのように騎馬土偶が作られた時代にもっと幅をもたせようとする提案も出てくるのだが、ギリシアやキプロスからの入植者の都市であったナウクラティスの特殊性は無視できない。

東部デルタの都市メンデス (Mendes) から出土した土偶のなかにも、騎馬像としてはないけれど 2-b タイプの人形が含まれている<sup>8)</sup>。4 脚の動物形も 1 点あるが、首が短いので馬ではなく、S. レッドフォードはこれを牡羊と

6) W. M. Flinders Petrie, "Memphis I", London, 1909, pp. 15–17, Pls. XXXV–XLIV.

7) W. D. E. Coulson, "Ancient Naukratis Vol. II", Oxford, 1996, pp. 139–145, Fig. 55 Nos. 11, 12, cf. R. A. Higgins, "Catalogue of the Terracottas in the Department of Greek and Roman Antiquities", British Museum, London, 1954.

8) D. Redford, "Excavations at Mendes Vol. I", Brill, 2004, Figure 82–85.

推定している。ガチョウらしい鳥形もあり、これらはどれも粘土粒の目がついている。加えて、1タイプや2-aタイプのような扁平な土偶も出土している。破片なので全体像は不明であるものの、その一つはコブラ形のように底部が後方に向かって伸びている。外形は異なっていたとしても、アコリスと同様に2-bタイプの土偶と扁平土偶とが共存しているという点で興味深い。これらの土偶は第29王朝のネフェリテスⅠ世(c. 399/8–394/3)墓を取り囲むように築かれた(神殿の)壁の内側に堆積した攪乱層からの出土だが、土器をみる限り末期王朝時代の範囲を外れる遺物は含まれていない。なお、末期王朝時代におけるデルタ東北部の州都であったタニスでは、第3中間期の土偶のなかに円形の粘土粒を貼付けて目や口を表現した手捏製品が発見されているけれども<sup>9)</sup>、やや大型で、筒状の体部は肩や腕を欠いているので、騎馬像とみられる人形とは分けて考えたい。

このように末期王朝時代になるとデルタの諸都市で、少量ずつではあるが同型式の騎馬像が分布しており、出土状態をみる限り、それらは一般に言われているような副葬品としてよりも、神殿や聖所への奉獻品だった可能性のほうが大きいのではないと思われる。

### エジプト周辺地域の騎馬土偶(メソポタミア・湾岸地域)

西アジアでは騎馬土偶は珍しくない。まず、古バビロニアからパルティアまで長期に亘る大量の土偶が出土したメソポタミアのニップール(Nippur)の騎馬土偶からみることにしよう。

ここには3種の騎馬土偶がある。土偶をまとめたL. ルグランの報告<sup>10)</sup>では、いずれも新バビロニアからパルティアまでのグループに一括されているが、アケメネス朝時代には多くの馬形土偶が墓に埋納されたことやゾロアスター教における馬の神性に触れることによって、騎馬土偶の起源をペルシアに求めるとともに、それらがセレウコス朝以前であることを示唆している。

一つのタイプは、額の上で結び目を作った長い布製の被り物をつけたペルシア人が乗った騎馬像である。頭部だけは鋳型で作っているの、顔の表現は具象的である。その他の部位は馬も含めて手捏の製品で、馬の目は粘土粒の貼付けである。2番目のタイプは、頂部が平たく広がる帽子を被った人物でマケドニア人と推定されている騎馬像である。これは全体が手捏の製品である。馬の目は同じく粘土粒の貼付けであるが、この馬には馬勒や手綱が描かれている点で、他のタイプの騎馬土偶とは異なる。残るタイプはアコリス2-bタイプと同じく、素朴な騎士と馬からなる手捏製品である。目の部分に粘土粒を貼付けている点も共通しており、このタイプが最も多く出土している。ところが、よく観察するとどれもヘルメットか、あるいは帽子のようなものを被っている点で、他の騎馬土偶と共通している。報告者が推定しているように、このこれらの騎馬土偶がすべて紀元前6～5世紀に属するのであれば、ギリシア・ローマ時代に大量に生産された鋳型作りの中空土偶とは異なるが、第1のタイプのような部分的な型作りの技法がヘレニズム時代以前にメソポタミアで知られていたことになる。

ヘレニズム時代以前と考えられる騎馬土偶は、クェート・ファイラカ島のカズネ(Tell Khazne)からも大量に出土している。J-F. サレによると、騎馬土偶は出土土偶全体の64%を占めているという。ここでも被り物の特徴からペルシア人と特定できる騎士像が数点あり、それらはニップール出土例と同様に顔面だけ鋳型で作っている<sup>11)</sup>。これについてサレは、1つの鋳型に粘土を押し付けて作ったものであると述べている。型を使いながら中空になら

9) P. Brissaud et C. Zivie-Coche, "Tanis 2 1997–2000", Paris, 2000, Pl. I B et XX, B.

10) L. Legrain, "Terracotta from Nippur", Philadelphia, 1930.

11) J-François Salles, "Tell Khazneh: Les Figurines en Terre Cuite" in "Faiaka 1984–1985", Lyon, 1986, pp. 143–178.



ないのはこのためで、ギリシア・ローマ時代の土偶は両面鋳型作り、ここにみるような土偶については片面鋳型作りと呼び分けるべきかもしれない。この方法で成形されたペルシア人騎士と数点の女性を除くほとんどの土偶は手捏で、目は粘土粒で表現するタイプなのだが、ニップール出土例と同様に、どれもヘルメット、あるいは帽子のようなものを被っている。これもメソポタミアの騎馬土偶の特徴といえる。動物形は手捏の粗製品ながら種類に富んでおり、馬の他に駱駝、ライオン、鳥、羊、猿などがある。これらの土偶は種類を問わず、全て聖所への奉獻品と推定されている。

同じくファイラカ島のイカロス（Ikaros）でも、鋳型作りのペルシア人騎馬像と手捏製騎馬像の2種の土偶が出土している<sup>12)</sup>。しかし、ここでは騎馬土偶と共に紀元前3～2世紀と推定されるギリシアタイプやエジプトタイプの土偶が出土している。出土状況からだけでは、ヘレニズム以前の騎馬土偶の伝統がそれまで続いていたとみるか、ヘレニズム以前からの土偶の集積とみるかは判然としない。もちろん、地域によってギリシア文化の定着速度や伝統文化の強さに違いのあることは当然であるから、両者の併存自体は不思議ではない。しかし、このペルシア人騎馬土偶は頭部だけでなく、中空ではないが全体を鋳型で作っており、ニップールやカズネから出土したペルシア人騎馬像とは明らかに異なる。

さらに手捏の騎馬土偶もこれまでみてきたようなタイプとは違って、頭部が異様に大きく、しかも顔面だけでなく体全体の作りが寸胴で粗雑である。頭には平らな帽子を被っている例もある。人物だけでなく、馬の形も異なる。最も異なるのは、尖った鼻先をもつ長い頭部全体が顎を引くようにして首にくっついている点である。加えて、4本の脚は上にいくほど極端に太くなって逆三角形を呈している。この特徴的な馬の形はスーサ（Susa）に類例があって、セレウコス朝かパルティア時代と推定されている。従って、これらの騎馬土偶は手捏製品ではあってもヘレニズム時代の所産と考えるべきで、それ以前の土偶を含んでいるわけではないと思う。

このようにメソポタミアでは騎馬土偶は長期に亘って作られ続けたのであるが、その性格については明らかになっていない。馬を太陽神信仰と関係づける説は根強く、H. E. マチーゼンはP. アッカーマンの説を引き、騎乗者を太陽神とみなしている<sup>13)</sup>、先述したようにL. ルグランはゾロアスター教の神アフラ・マズダの太陽神的性格と馬を結びつけている<sup>14)</sup>。加えて、ペルシア人の馬に対する特別の愛着も挙げているので、彼の場合は、騎馬土偶をペルシア起源とすることに眼目があったのかもしれない。

ルグランはまた、ペルシアタイプの騎馬土偶の多くが墓から出土しているとも述べているが、ここで取り上げた遺跡のように、土偶は墓以外からも出土する例が少なくない。ヘレニズム時代に下るイカロスの場合、土偶の多くは居住区から出土していて、残り僅かの土偶が神殿から出土している。従って、奉獻品としての性格も希薄である。この点についてマチーゼンは従来のおもちゃ説にも触れてはいるが、それよりも家内信仰の対象としての可能性を指摘しているのが注目される。アコリス北端区で出土した大量のプトレマイオス朝時代の土偶の性格もまさにそのようなものと考えられるからである。しかし、そのことは副葬品、あるいは奉獻品としての性格を否定するものではないし、もちろん末期王朝時代の土偶の性格を決定づけるものでもない。

12) H. E. Mathiesen, "Ikaros Volume 1 The Terracotta Figurines", Copenhagen, 1982. ペルシア人騎馬土偶は Fig. 13, パルティアタイプの騎馬土偶は Fig. 6. スーサ出土例はロマン. ギルシュマン著『古代イランの美術Ⅱ』新潮社, 1973年, 挿図118.

13) 前掲 H. E. Mathiesen, 1982, p. 22, P. Ackerman, "Horses in the Cult of the Sun", Crawfoot, 1957.

14) 前掲10 L. Legrain, 1930, p 31.

## エジプト周辺地域の騎馬土偶（パレスティナ・ギリシア）

パレスティナとフェニキアのヘレニズム以前に属する土偶のなかにも騎馬像が数多くみられる。“ダビデの町”と呼ばれたエルサレムを中心にユダ王国内から出土した土偶は1300点にも及び、紀元前8～6世紀と推定されている<sup>15)</sup>。

人形は手捏のアコリス 2-b タイプ、丸い顔に強く巻いた髪を持つ鋳型作りの女性頭部、轆轤挽か手捏製で乳房に手を当てた柱状の女性像の3種に分かれ、そのほとんどは破損している。動物土偶では頭部に細い粘土紐を貼付けて面繋を表現した馬形もあるが、粘土粒の目をもつ手捏作りの素朴な馬形が圧倒的に多く、動物土偶の82%を占める。人形と馬形は分離して出土しているが、騎馬像として人と馬が接合した形で遺存している例も残っているからアコリス 2-b タイプの人形と馬形がセットとなることはほぼ間違いない。また、同時期に作られた髪型に特徴のある女性頭部は柱状土偶の頭部と考えられるので、メソポタミアと違って騎馬土偶に鋳型作りの頭部を接合した人形を組み合わせた例は、これまでのところ見当たらないようである。

パレスティナ出土例と似たような手捏の騎馬土偶は、南レバノンの都市・シドン（現サイーダ）の丘陵地からも発見されている<sup>16)</sup>。しかし、パレスティナに比べると土偶全体に占める割合は格段に小さく、柱状土偶の少なさと相まってパレスティナからの影響がさほど大きくなかったことを示している。これに対してキプロスやエジプトからの影響は強く、ファラオの付け髭やベス神だけでなく、髪型や円錐形の被り物にもその特徴がよく表われている。報告者の G. コンタノは、ヘラレ（Helalieh）もアヤ（Ayaa）も大きな墓地遺跡であることから、これらの土偶を副葬品とみているようだが、これら丘陵地に墓域が形成されるのはヘレニズム時代以降のことであり、土偶の年代とは合わない。おそらく土偶は聖所に奉献されたものではなかろうかと思う<sup>17)</sup>。

フェニキアとキプロスとの強い繋がりを示す騎馬土偶は、フェニキア南端の都市ティルス（現ティール）で発見された紀元前7世紀と推定される堅坑墓から出土している<sup>18)</sup>。土偶全体の高さが18.7 cmであるから、パレスティナの騎馬土偶よりもかなり大きい。騎乗の人物は両脇に角のある円錐形のヘルメットを被り、左手には大きな盾をもっている。頭部の保存状態がよくないが、報告者の K. イエーリックによれば頭部だけは鋳型作りの可能性が大きいという。いっぽう、馬は胸から脚にかけて、水平に塗られた赤と黒2色の彩色が残っている。ギリシアやキプロスの騎馬土偶が有する特色の一つが彩色で、目も黒い顔料で描かれることが多いのだが、この土偶に関しては人形頭部の風化が進んでいるのと馬形が頭部を欠いているため、目の表現についての確認はできない。

キプロスでも土偶が墓から出土する例はあるが、聖所から出土することが多い。なかでも島の北西部の沿岸に位置するアイア・イラニ（Ayia Irani）は、奉献された土偶の多さで他を圧倒している<sup>19)</sup>。聖所は後期青銅器時代から紀元前6世紀まで機能していたが、土偶はその末期である625～500年に奉献されたと考えられている。ほとんどは様々の大きさからなる人形で、実物大のものから10 cmほどの小型品までである。直立した男子像が多く、大きな円錐形のヘルメットを被った戦士達である。ティルス出土の騎馬像とよく似た角付きヘルメットを被った例もあ

15) D. G-Peretz, “Ceramic Figurines” in D. T. Ariel and A. de Groot eds., “Excavations at the City of David”, Jerusalem, 1996.

16) G. Contenau, “Mission Archéologique à Sidon (1914). Syria”, Tome I, Paris, 1920, pp. 305–317.

17) 辻村純代「郊外型墓地の出現とその背景—フェニキア都市の再考—」, 『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』, 広島大学考古学研究室, 2004年, 1087–1100頁。

18) K. Lehmann-Jericke, “The Terracotta Horseman” in M. E. Aubet ed., “The Phoenician Cemetery of Tyre-Al Bass Excavation 1997–1999”, BAAL Hors-Série I, Beirut, 2004.

19) V. Karageorghis, “The Cyprus Museum”, Nicosia, 1989, Pl. 72: Votive figurines.

り、どれも眉や目は黒い線で表現している。ところが、この遺跡における動物形の主役はキプロスの伝統的な農耕神ミノタウルスと考えられている牛であり、馬は戦車の牽引馬として登場するにとどまる。

もちろん、騎馬土偶がキプロスになかったわけではない。騎馬土偶としては紀元前7世紀という古い年代が与えられているアマトス（Amathus）出土例は、高さ12 cmの小型手捏製品である<sup>20)</sup>。素朴な線で人形には眉や目、顎の髭、指を描き、いっぽう、馬形には目、面繋のほか首から前脚にかけて梯子状の文様を描いている。また、国立博物館に所蔵されている紀元前6世紀の騎馬像<sup>21)</sup>は、高さ21 cmだからティルス出土例が馬の頭部を欠いていることを考慮すると似たような大きさである。馬の長い首の前面から前脚にかけて、やはり同じような赤と黒の彩色が施され、円錐形のヘルメットを被った戦士は赤く着色された短剣をもっている。そして人、馬ともに、黒い線で大きな目が描かれている。これらの人形頭部は手捏であるが、これらの特徴からみてティルス出土の騎馬土偶と同タイプであることは疑いない。

このようなキプロス・フェニキアタイプの騎馬土偶は、東方ではヨルダンまで分布している。アンマンの南に位置するムカバレン（Muqabaleen）の墓で発見された土偶（紀元前700～550年）<sup>22)</sup>は、馬形に比べて大きすぎる人形のプロポーションは歪だが、顔の造作は丁寧で、目のまわりを縁取った沈線に黒い色が残っている。円錐形のヘルメットを被り、右手には鞭をもち、このタイプに共通する横縞の彩色が人形の胸に施されている。ただし、高さ12 cm、幅9 cmと全体のサイズが小さいことや、馬形の首が短い点など、西アジアの影響もみられる。

話を地中海に戻そう。ミュケナイではⅢ期の騎馬土偶（紀元前1300年頃）が知られているが、アッティカでもカルヴァティ（Kharvati）の墓から初期の騎馬土偶が発見されている<sup>23)</sup>。馬に比べて格段に大きく表現された人物の異常に長い両手が馬の頭上に伸び、扁平で角張った造形が硬直したような印象を与えるこの土偶は2千年紀末に遡る。その後の数世紀に亘って馬形は騎馬像としてよりも、霊柩車の牽引、あるいは鳥形や女性像などと一緒に壺の装飾として登場することの方が多いのだが<sup>24)</sup>、それら馬形土偶の形態は、首が長く、脚も細くて長いという古典期の騎馬土偶に通じる特徴を既に有している。また、ギリシア型土偶の一般的な特徴である線描や加彩の手法は、初期の馬形や騎馬土偶にも認められる。

他の地域と同様にギリシアでも土偶は墓に限らず、聖所や住居、作業所などからも発見されるが、騎馬土偶は前6世紀になると墓に集中するようになる<sup>25)</sup>。これについては、英雄信仰の高まりに伴い、死者を英雄として埋葬するために騎馬土偶を成人男性墓に副葬することが習慣化することになったと説明されている。確かに、ギリシア・キプロス・フェニキアグループの騎馬土偶には盾や剣などの武器をもった人物を表現している例が多い。しかし、武装した神は少なくないから、それが武人でなく、神を表している可能性は残る。

## エジプト騎馬土偶の系譜

西アジアでもギリシアでも紀元前1千年紀、特に中葉には盛んに騎馬土偶が作られた。いずれも手捏製品だが、頭部のみは片面鋳型で作るバルシアタイプ、粘土粒を貼付けて目を表現するメソボタミア・パレスティナタイプ、

20) B. F. Cook ed., “Cypriote Art”, British Museum Publications Limited, 1979. BMC Terracottas A 166.

21) 前掲19 V. Karageorghis, 1989, Pl. 78: Figurine of a horse and rider.

22) 日本、ヨルダン・ハシェミット王国国交樹立50周年記念事業『ヨルダン展』, 2004年, 106頁。

23) G. M. A. Hanfmann, “A Near Eastern Horseman. Syria”, Tome XXXVIII, Paris, 1961, pp. 243–255, Fig. 6. ミュケナイ出土の馬形土偶は, M. S. F. Hood, “A Mycenaean Cavalryman”, BSA, 48, Figs. 47, 48 参照。

24) 例えば, アテネのセラメイコス墓出土の馬形土偶の装飾付き壺がある。

25) Cf. D. C. Kurtz and J. Boardman “Greek Burial Customs”, Thames and Hudson, 1971.



線描で目を表現し、彩色を施すギリシア・キプロスタイプに大きく分類できることは先述したとおりである。

アクリスで出土した騎馬土偶はメソポタミア・パレスティナタイプに含まれ、さらに言えばヘルメットや帽子などの着用表現がみられない点でパレスティナ出土例により近い。また、騎馬土偶はいずれの地方においても特定の遺構と結びつかないで、墓、聖所、神殿、居住地など異なった場所から出土するために、その性格も副葬品、奉獻品、呪物、おもちゃ説など多岐に亘っていて未だ定まっていけないのだが、墓との関係が希薄である点においてもエジプトの騎馬土偶はギリシアよりもパレスティナのそれと近いように思われる。

ところで、エジプトでは騎馬土偶だけでなく、馬の造形そのものが他の動物に比べて少ないのは、エジプト人にとって馬が馴染みのない動物だったからではない。戦場で2輪戦車を引いて颯爽と駆け巡る馬は勝敗を左右する主要な戦力であり、平時において2輪馬車は王や貴族の乗り物でもあった。それは他国と同様に、エジプトでも馬のもつスピードと優美な姿が支配者の心を強く捉えたからに他ならない。それに、馬がエジプトに紹介されたのは意外に早い。

一般には、ヒクソスの侵攻によって戦車と馬がアジアから齎されたと言われているが、それ以前に遡ってヌビアのブーヘン（Buhen）からは中王国時代（c. 2050–c. 1786 BC）の馬骨が発見されている。高さが約1.5 mと推定されており、テーベにあるネバムンの墓（Nebamun, c. 1355 BC）に描かれた2輪者を引く馬の推定値と同程度である。

新王国時代になると保有する馬の頭数も飛躍的に増え、例えば新都アマルナからは200頭を収容する厩舎が発掘されている。もちろん、国内での繁殖もあるが、メギドの戦いによってトトメスⅢ世（1504–1450 BC）が得た戦利品リストに馬2041頭と記載されていることからわかるように、戦争に勝利すれば敵方の馬を大量に獲得することができた<sup>26)</sup>。そして、前10世紀には、ヘブライ人の王から馬を乞われるほどに優秀な馬を有していたのである<sup>27)</sup>。けれども、それらの馬は騎馬用ではなかった。

長い間、馬が専ら2輪馬車の牽引に利用され続けたのは、エジプトに限られたことではない。また、アッシリアが騎馬軍団の威力をもって飛躍的に版図を拡大したからといって、周辺諸国のすべてが騎馬軍団の形成を目指したわけではないのである。ギリシアでも前6世紀になると武装した騎馬兵が槍をもって戦う姿が盛んに壺に描かれるが、しかし、ギリシア軍の主たる戦力が密集して戦う装甲歩兵ファランクスだったことは周知のとおりである<sup>28)</sup>。

エジプトにおける騎馬の風は一層、希薄であった。斥候や外国人の傭兵が馬に乗ることはあっても、戦術として歩兵と連携して戦う騎馬兵すらいなかったのではないだろうか。これに関して、R. ジャンセンが興味深いエピソードを伝えている。第3中間期の末、西部デルタの王子であったテフネクテ（Tefnehkte）が敵（クシュ軍）から逃れる際に戦車を求めもしないで、馬の背に乗って逃れたことを“誠に不名誉な退却だった”と非難した資料が残っているのだ。アッシリアがエジプトに侵攻する半世紀ほど前のことではあるが、エジプトでは如何に騎馬が野蛮で無様な行為とされていたかがわかる。このように騎馬に対して根強い嫌悪をもつエジプトが、わずか10年に満たないアッシリアの支配によってその嫌悪感を払拭し、大規模な騎馬軍団を形成したと想像するのは難しい<sup>30)</sup>。

26) Cf. R. and J. Janssen, “*Egyptian Household Animals*”, Shire Publications LTD, 1989 pp. 36–43, I. Shaw and P. Nicholson, “*British Museum Dictionary of Ancient Egypt*”, British Museum Press, 1995.

27) 『列王記』上、第4章第26節、『イザヤ書』第31章第1節。

28) Cf. P. A. L. Greenhalgh “*Early Greek Warfare*” Cambridge, 1973.

29) 前掲26 R. and J. Janssen, 1989.

30) 本村凌二氏は、「（アッシリア帝国が擁した騎馬隊の活躍に刺激されて）、支配下の異民族であるカルディア人、リディア人、エジプト人、メディア人らにも騎馬の風習が広まっていくことになった」と述べている（本村凌二『馬の世界史』講

実際に騎馬の風習が社会に果たした役割が国によって異なるように、馬に与えられた宗教的イメージもまた一様ではなかった<sup>31)</sup>。例えば、ギリシア神話では、馬はこの世と冥界を繋ぐ動物とされた。冥界の王ハーデスに攫われたデーメテル女神の娘ペルセフォネの物語は夏と冬を分けた由来を語って有名だが、娘が攫われた時も馬車で連れ去られ、彼女が冥界とこの世とを往来するために乗り込むのも馬車である<sup>32)</sup>。この物語からもわかるように、ギリシアでは馬は死者を冥界に導くと考えられていたので、墓には土偶だけでなく、レリーフや壁画のモチーフとしても、しばしば馬車が登場するわけである。

このような馬のイメージはペルシアにも存在したとして、R. ギルシュマンは2つの例を挙げている<sup>33)</sup>。しかし、その2例がクサントスとシドンとなると、どちらもペルシア帝国の西端に位置し、ギリシアの影響も強いところであるから、ペルシア本来のものかどうかは疑問が残る。ペルシアでは、やはり馬は太陽神との関係が深いとする方が妥当ではあるまいか。

馬に騎乗する神としては、シリア・パレスティナではアナトやアシュタルテ両女神、パール神などが知られている。アナト信仰は1千年紀には廃れていたと考えられているけれど、旧約聖書には勇者に対して“アナトの息子”という慣用句がみられる。また、ギリシアでは、死後に双子座の星になった勇者ディオスクロイが知られている。このように、両地域では共通して神というより勇者が騎乗する馬のイメージが強いのだが、しかしディオスクロイは勇者であり、かつ神であるのに対して、“アナトの息子”は女神アナトに仕える勇者でしかないという違いは明確にしておかねばならない。

そして、アコリス出土の騎馬土偶もその一つは盾をもって、いかにも勇者にふさわしい姿ではあるのだが、果たして神である可能性はあるのだろうか。神でなく、勇者だとしても、この勇者には仕えるべき主人がエジプトにいるのだろうか。ヘレニズム時代になれば、短剣や盾をもつベス神、馬に乗ったハルポクラテス神（子供のホルス）が土偶として表現されるが、少なくとも王朝時代のエジプトにはそのような姿で表現される神は存在しないし、僅かに遺された新王国時代の青銅製騎馬像<sup>34)</sup>をみると、翔る馬の背に乗っているのは裸の少年であるから、勇者や武人としての性格すら認められない。従って、エジプトの騎馬土偶に関する限りは伝統的な宗教や祭祀とは繋がりをもたない遺物というほかないのである。

ところで、ディオスクロイ<sup>35)</sup>はアコリスの岩山の南壁にも、その姿が刻まれている。ディオスクロイの多くは騎馬像として描かれ、馬と海や泉との関係は深い。船を“海上の馬”とみる考えがあったとすれば、ローマ時代になってディオスクロイが航海の保護者として信仰されたことも納得できる<sup>36)</sup>。そうであればこそ、ローマの長距離

談社現代新書2001年、70頁。)が、少なくともエジプトにおいては、それを示す資料は管見にして知らない。

31) 川又正智著『ウマ駆ける古代アジア』（講談社、1994年）は、ユーラシア全体を視野において、ウマに関するこれまでの研究成果をわかり易くまとめた本である。そのなかにも、馬が宗教・葬儀と深くかかわる動物であったことを示す例が幾つか紹介されている。206－212頁。

32) 山室 静『ギリシア神話』、教養文庫、1962年、52－53頁。

33) R. ギルシュマンは、死者を馬車に乗せた葬列の後を騎乗者が従っている場面を描いたクサントスで発見された墓の浮彫り（前470年頃）やシドン出土の石棺浮彫り（前4世紀中頃）を取り上げ、ペルシアでもギリシアと同じく馬が死者を冥府に連れ戻すと考えられていたことを明らかにしている。（『古代イランの美術Ⅰ』新 喜久男（翻訳監修）、新潮社、1973年、350頁。

34) 大英博物館蔵 EA36314、第18王朝、出土地不詳。

35) ゼウスとスパルタ王妃レダの間に産まれたカストルとボルックスの兄弟を“ディオスクロイ”（ゼウスの息子達）と呼んでいる。山室 静『ギリシア神話』教養文庫83－84頁。

36) ギランによれば、ポセイドンに従うのは、「噴出する泉を象徴する馬と、土地を肥やす力あるいは猛烈さの象徴である牡牛」である。また、ポセイドンに競馬が奉納されるようになったのは、馬がこの神のもつ三叉の鉾から生まれたからだとして述べている（F. ギラン『ギリシア神話』（中島 健訳）青土社、1982年、147－1148頁）。馬と船のアナロジーについては、前掲30 本村凌二、2001年、106頁。

交易の一部をなしたナイル河岸の都市アコリスの、それもナイルを臨んだ見晴しのよい地点にその浮彫りがあるのも大いに頷けるわけである。しかし、このレリーフはヘレニズム以前には遡り得ず、またアコリス出土の騎馬土偶の人形は神を表している可能性が低いから、ディオスクロイとの直接的な繋がりはないと思われる。

## その後の騎馬土偶

末期王朝時代の土偶には、伝統的な神などエジプト的な造形の他に、騎馬像のような外来的なものがある。後者にはペルシア系の土偶も含まれるが、それはメンフィスのような大都市に限られ、エジプトに広く分布しているのはパレスティナ系の騎馬土偶であった。それは、フェニキア型アンフォラなどとともに持ち込まれた搬入品の可能性が大きい<sup>37)</sup>、仮にそうでないにしても彼の地の文化的影響を強く受けた遺物には違いない。

長い間、伝統的な神々に固執し、騎馬をタブー視してきたエジプト人には、パレスティナの騎馬土偶が神の騎乗ではなく、あくまでも武人・勇者の姿であったことが、彼らを刺激しないで受け入れられる理由だったのではないかと推察される。ところが、末期王朝時代の人々は伝統的な神々を崇敬する一方で、神とファラオとの安定した関係を祈願する既存の宗教に満足せず、無事な出産や子供の成長、病気の治癒といった世俗的な個人の願いが新たな信仰の形を取りはじめることにも注意しなければならない<sup>38)</sup>。神殿に納められた大量の動物ミイラだけでなく、土偶もそうした民衆の願いがこめられた製品であるから、あるいは騎馬土偶に対しても邪気を払う力をその勇猛な武人・勇者の姿に期待したのかも知れない。そうだとすれば、太陽神とも葬送儀礼とも関係のないエジプト的な解釈が与えられたことになる。

アレキサンダー大王の遠征によって、エジプトはギリシアの支配に下る。と同時に、これまでとは比較にならないほどの力でギリシア文明の波がエジプトに押し寄せたであろうことは想像するに難くない。土偶もそれまでのような素朴なものとは全く異なり、首都アレキサンドリアの墓に埋納されたのは優美で繊細な女性像であった。“タナグラ人形”と呼ばれるこの人形は、前5世紀にギリシアで作られるようになったと言われているが、プトレマイオス朝以前のエジプトには知られていない。また、プトレマイオス朝に移った後も、地方都市ではほとんど見ることがない。そういう意味では、“タナグラ人形”は作品としてのみごとさにもかかわらず、エジプトの土偶に与えた影響はそれほど大きなものではなかった。

それよりも後半になって全国に普及した鋳型作りの土偶こそは、エジプト人の宗教観の転換を示している。それは単にエジプトの神々とギリシアの神々との共存、あるいは両者の習合だけを意味しない。末期王朝時代には既に揺らぎ始めた伝統的宗教観に替わる信仰の萌芽がここきて土偶に顕在化するからである。換言すれば、土偶の大半を占めるイシス、ハルボクラテス、ベスはいずれもエジプトの神であるが、そのトリアドはもはや本来の宗教世界からは逸脱しているとしか言いようがない。その転換はギリシア文明によって突然に引き起こされたのではなく、エジプト文明の衰退化のなかで、自らが選んだ方向の行き着く先にあったと考えたい。

ヘレニズム時代の土偶には、ハルボクラテスが騎乗する馬が登場する。もちろん、ハルボクラテスは必ずしも馬

37) デルタの諸都市からフェニキアタイプのアンフォラが出土することは珍しくない。アコリスでも末期王朝時代後期に属する破片の出土をみている。

38) 世俗的な民衆の願望から生まれる信仰はヘレニズム時代に顕著になる。一般にヒーリング・カルト（癒しの信仰）と呼ばれる。生活に密着した様々な不安を解消し、多産、豊穡、治癒を願って呪具や土偶が求められ、また点灯祭などが全国的な規模で執り行われた。点灯祭についてはヘロドトスとその様子を伝えている。『歴史』巻2-62（松平千秋訳）、講談社、1972年。Cf. D. Frankfurter, “Religion in Roman Egypt”, Princeton University Press, 1998.



に騎乗しているわけではなく、様々に表現されるなかの一部に過ぎない。それにハルポクラテスはあどけない子供の神なのだ。しかし他方では、手にサソリを掴み、ワニを踏みつけている姿で表わされ、その背後にベスの異形な顔が刻まれた小型ステラ（Horus-cippus）が魔除けとして用いられ、広く信仰を集めていたのである。このステラは末期王朝時代からローマ時代まで知られている。こうしたハルポクラテスの勇ましい性格は、“騎乗する神”として違和感がない。

騎馬を好まず、馬を自らの神話世界に取り込むことを長きに亘って拒否してきたエジプトは、ヘレニズム時代になって漸く騎馬像を民間信仰として受け入れた。しかし、それは外来の騎馬像としてではなく、あくまでも自らの宗教的なコンテキストによって受容した点で、エジプトにおけるヘレニズムの内実の一端を示しているように思われるのである。